



【2017-11-08】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、
人生を味わう

今週の雑感

『スピードファースト？』

長野修二

スピードファースト？

現代はスピードファーストの時代でしょうか。

何事も急げといわれ企業の現場は疲弊しているように見えますが、そう思うのは、私だけでしょうか。

スピードという概念を使うことは、そもそも事業内容を考慮したうえで考えなければならないのではないのでしょうか。

例えば「金融」のスピードの概念と「製造業」の概念は同じにはならないでしょう。

今の時代、金融はコンピュータシステムを使い瞬時に対応した結果が出せますが、製造業では、必ず一定の品質という要素が組み込まれており、そのプロセスはむしろスピードの概念に反する場合があります。また、政治の世界でも「人間」がおこなっている以上、人間の成長なくしてよい政治を実行することはむずかしいのではないのでしょうか。行政とて同じです。

それぞれのエリアの課題を抽出し、一定の方向付けをおこなって具体的な施策を実行するというプロセスには、不安定な要素も含まれており、スピードをもって対応できる施策もあれば、工事のように長期間そのプロセスをチェックしながら完工まで実行するような施策もあります。

スピードという概念は、どれも一律に人間の頭にインプットされますが、施策や事業領域によってスピードにおける時間の概念は相当な違いが生じてくるでしょう。

スピードとは、ある意味で「手際よく」ということでしょうか。

意味を調べてみると「物事をよどみなく処理し、要領よく進行させるさまなどを示す表現」とされています。

これをスピードという意味で比較すると、スピードとは「速さ、速度、速力」ということになり、相手がある競争上のはやさだけが誇張されてしまうように思います。

仕事とは、もともと同じような物を作っているとしてもそのプロセスや時間など複数の要素がそれぞれの企業内で醸成され、多くの違いが存在します。

しかし、製造業でいえば納期という確定要素が優先されることで本来自社が持っている製造業特有のプロセスを省みることなく、「はやさ」だけの仕事をおこなっていることが結構増加しているのではないかと、想像しています。

理由は、営業部門などからくる「他社は何日で出来る」という納期要件によってすべてが決定される世界だからです。

これによって「はやさ」だけの勝負をおこなっているのが、現在の製造業の特徴かも知れません。

このような背景と日本企業特有の属人的な組織のうえで、それぞれの企業が有しているプロセスや法令などを無視し、今日、壊滅的な状況を作りだしているようです。

一旦、自社の正常なプロセスを壊してしまうと、壊したプロセスのうえでしか勝負ができなくなります。

まともな勝負を挑めば、「はやさ」を喪失し、受注ロスが生じるという脅迫観念に襲われるからです。

そして日本企業村は、全員で暴走していくことになります。

中小企業ならいざ知らず大手企業がこのようなことになっていけば、大手企業の下請け企業でも同様な対応を迫られているはずです。

その結果、日本の国力を落としていくことになるのでしょう。

政治の世界に目を移せば、〇〇ファーストならぬ自分ファーストではやさを競った結果、これまでのプロセスをすべて瓦解させてしまったタイプの人間がいます。

行政を統括するだけでも数十年かかる時間軸でしょうか。

それも放棄して新たに国政に挑戦するなど、はやさ＝欲望の概念だけしか頭がないようです。

本来、物事を成就するまでには相応の時間軸が必要です。

数回の人気という空気のようなもので世の中が連続して動くほど、社会は、否、人間は簡単にはできていません。

政治はある意味で人気商売でしょうが、当選すれば、国民がみていようがいまいが、陰に日向に着実な実行力が試される世界ではないでしょうか。

企業とて同じです。

どのような人気企業でも着実に実務をおこなう人間がいてはじめて企業は成り立っています。

むしろ人気がある企業ほど、日常的な仕事は地道な積み重ねしかありません。

入社して幻滅することは、多くの人が経験しているところでしょうか。

スピードという言葉はポジティブに使われますが、私に言わせれば「バカの一つ覚え」でしかありません。

そのような言葉のイメージだけにとらわれていると、おそらく何も成就できないのではないのでしょうか。

物事を変える、変革するといことは、私は十年単位でみていく必要があると考えています。

理由は、現場で実践していれば、「変える」ということがいかに大変かということは身に染みて経験しているからです。

大手企業の子会社とて絶対的に有利な状況からでも立ち上げに十年近くかかっています。

そのうえで花開くのに二十年くらいかかっているのでしょうか。

一人の人間が人生でこのような経験をすることができるチャンスは、一人に一回ないはずで。

政治の世界でみれば、伝統的な政党に勝って政権を取った人たちは、どんなに頑張っても次に政権を取るチャンスはないでしょう。

では、どうすればよいか。

若い人たちを育成することに徹することです。

その意味では、政党を壊すことは良いことですが、これまでの政党人の多くが残るような組織では国民にとって不幸なことになるのかもわかりません。

いずれにして「はやさ」だけを競う時代ではありません。

世界を相手に「品質」と「価値」を認められる製品やサービスを生み出していかなければならない時代です。

「はやさ」だけを言う経営者は、案外、独善的で自らのことしか考えていない経営者とおいておいたほうがよいでしょう。

もはや、今は自社の内部プロセスを一旦見直すために「はやさ」を押さえ、売上の減少も覚悟し、企業の存在意味を再度問い直さなければならないときではないのでしょうか。

今なら株主へ説明も容易です。

他社の現状に照らし合わせて事業内容の全面的な見直しをおこないますと、言うだけです。

さらに事業内容によっては、来期の業績に影響を与えることがありますと、言うだけです。

さらに、今見直しをおこなっておかなければ、将来株主に多大な損害を与えることが懸念されると考えておりますと、言うだけです。

なにもなければそれでよし、何かあれば、抜本的な改革をおこないましたと、するだけです。

日本企業が置かれている状況は、政治も同じですが、まさに「はやさ」ではなく、立ち止まって総点検をし、将来に向けた投資をおこなうことです。

投資は、なんといっても人でしょうか。

これまでの人材要件ではありません。

あくまで将来のための人材を確保していくことになります。

同時に経営者は、企業のフレームワークを明確にしていくことに尽きるのではないのでしょうか。

簡単なことですが、簡単なことほど実行することはむずかしいものです。